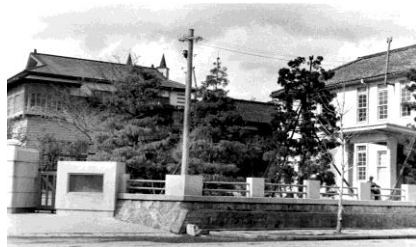


# 総合大学へ向け始動

## 最初の課題は統合整備

昭和24(1949)年、山口大学は誕生した。山口講堂以来連綿と継承されてきた県教育界の熱意と大学設置の悲願は、戦後の新学制のもとに結実し、いよいよ名実ともに総合大学へ向けての第一歩を踏み出した。

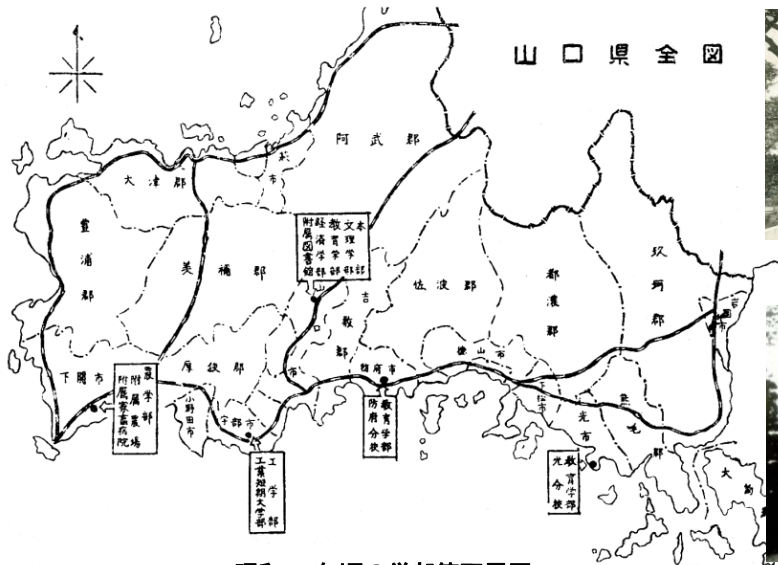
当初は各学部の母体である旧高専校から、文理学部、教育学部、経済学部、工学部及び農学部の5学部でスタートしたが、工学部は宇部市、農学部は下関市、教育学部は山口市に本校、光市と防府市にそれぞれ分校があり、新制大学の使命を果たすためには分散しているキャンパスの統合整備が大きな課題だった。



本部(山口市新道)



文理学部(昭和29年に山口市糸米から後河原へ移転)



昭和28年頃の学部等配置図



教育学部(山口市芳沢町)



経済学部(山口市亀山)



農学部(下関市長府)



工学部(宇部市常盤台)

## 旧高专校の廃校

戦前から県の高等教育を担ってきた旧高专校は、山口大学発足に伴って生徒募集を中止し、最後の卒業生を送り出した後、順次廃校になった。

- 昭和25年3月 官立山口高等学校
- 昭和26年3月 官立山口経済専門学校  
官立山口師範学校  
官立山口青年師範学校  
官立宇部工業専門学校
- 昭和27年3月 県立山口獣医畜産専門学校

最後の卒業生となったのは終戦後の混乱期に入学した学生達である。深刻な食糧難と物資不足の中、新学制の行方に不安が募る苦難の時代ではあったが、精一杯勉学に励み、青春を謳歌し、そして戦後の復興を担う人材として社会に羽ばたいていった。



官立宇部工業専門学校最後の卒業生(機械科十回)  
(昭和26年3月)

## 整備の始まり

昭和28(1953)年3月28日、山口大学として第1回目の卒業式が挙行された。また、同年6月、本部事務局が亀山の経済学部校舎から新道(現在の山口市民会館敷地)に移転し、いよいよ総合大学に向けて管理運営整備が本格的に始まった。

翌年10月には、文理学部が新制山口高等学校東校舎と敷地を交換する形で糸米から後河原へと移転した。次いで、昭和32年4月に教育学部光分校が、昭和35年に防府分校が山口の地へ統合された。

昭和30年代半ばのわが国は、池田内閣のもと高度経済成長期へ突入し、所得水準が上がるに連れて、高等教育熱も高まりつつあった。昭和38年の中央教育審議会答申「大学教育の改善について」には、主として技術革新を踏まえた理工系振興の必要性が力説されていた。



昭和35年頃の大学本部周辺図

## 学科・専攻科の新設

昭和20年代後半から30年代にかけて、高度経済成長に伴う高等教育熱はますます高まり、理工系学部を中心に学科・専攻科の新設が相次いだ。

昭和29年4月 経済学専攻科(経理経営学専攻)及び商業教員養成課程設置

昭和33年4月 工学部電気工学科設置

工学専攻科設置(機械工学専攻、鉱山学専攻、工業化学専攻、土木工学専攻)

昭和34年4月 農学専攻科設置(農学専攻、獣医学専攻)

昭和37年4月 工学専攻科(電気工学専攻)設置

昭和38年4月 工学部生産機械工学科設置

昭和39年4月 教育学専攻科設置

また、学科等の新設で事務が輻輳化したため、漸次事務機構の整備が行われた。昭和35(1960)年に従来の規程を廃止し、新しく山口大学処務規則並びに山口大学各課、学部等の事務組織並びに事務分掌規則が制定された。



工業化学実験



### 昭和30年代の事務室では… <職員OBの話>

私が山大に就職したのは昭和30年代初め頃で、初任給は6千円くらいだったと思います。当時の事務局は今の山口市市民会館の所にあつて古い木造建築でした。会計課の事務処理は算盤を片手に伝票をめくりながら、帳簿に記載していました。授業料の収納や給与の支払いは全て現金で、当時の授業料は年額9千円でした。(ちなみに昭和50年は3万6千円、昭和51年からどんどん値上がりして、現在は53万5千8百円也!) 文書はもちろん手書きです。コピー機もない時代でしたので、会議資料などは鉄筆で書いてガリ版刷りしていました。現在のようにパソコンや複写機を使って簡単に大量に資料が作成できる世の中が到来するなんて想像もつかなかつたですね。

夏は団扇とタオルが必需品。それでも暑い時には机の下に水を入れたバケツをこっそり置いて、足を浸して執務している人もいましたよ。冬になるとダルマストーブで暖をとるのですが、終業時間になるとどこからか酒瓶が出現し、若手職員は百円札を持たされて、川端市場(公設市場)に干物やちくわなど肴を買いに走るのが常でした。ストーブを囲んで小宴会が始まり、仕事のこと、大学のことはもちろんですが、将来の夢や人生談義など四方山話を上司や先輩から聞かされ、時には発破をかけられたこともありますが、娯楽の少ない当時としては楽しみの一つでした。



文理学部事務官等の年始め(昭和35年)

# 教養部設置と文理学部改組

戦後教育改革の一環として生まれた新制大学の一つの重要な特徴は、専門教育科目のほかに学部、学科、専攻を問わず全学生に共通する一般教育科目が必修として設定されたことである。一般教育の目的は、(1)民主社会に適合した市民的教養の教授・啓発、(2)専門教育に繋がる科学的かつ総合的な判断力の育成にある。一般教育の必修単位は、専門教育76単位に対して48単位と定められた。その内訳は、人文科学、社会科学、自然科学の各分野から合計36単位、外国語8単位、保健体育4単位である。

開学当初、本学の一般教育は他大学と同様に文理学部の教官が中心となり、各学部から応援を得て実施した。履修期間は初めは1年半だったが、専門教育期間との関係や学生の年度途中での学部(特に山口地区以外)移行にまつわる問題点などが指摘され、昭和27(1952)年より1年半の建前をとりつつ、実質的には1年に短縮された。

その後、高度成長期に入った昭和35年前後から理工系を中心とした大学拡充と学生増募の要請が高まり、一般教育の整備と学生指導体制の強化、並びに文理学部の改組問題が全国的に話題に上るようになった。こうした気運の中、文部省は中央教育審議会の答申に沿って、昭和38年、国立学校設置法を一部改正し、教養部の設置と文理学部改組をセットで実施する方針を打ち出した。本学では同年12月に文理改組委員会を設置し議論を重ねたが、学部構想と絡んで改組案作りは非常に難航した。

結局、昭和41年4月、独立した組織として教養部が発足した。文理学部から27名、工学部から1名、教育学部から1名、他大学から1名の合計30名(定員36名、欠員6名)の教員が移籍し、事務職員19名とともにスタートしたが、最初の1年間は文理学部に同居した。また、文理学部組織は理学科を拡充して続行することとなった。

各学部が異なった生い立ちと歴史を持ち、相互の壁が厚い本学の場合、教養部の設置は、総合大学としての一体感を涵養し、単科大学の集合ではなく真の意味で総合大学となるための礎石として重要な意味があった。

※その後、教養部は大学設置基準大綱化の流れにより、平成8(1996)年3月末、30年の歴史に幕を閉じ、教官は各学部に分属した。



第4回入学式(昭和27年)



文理学部校舎(後河原、昭和36年頃)

# 工業短期大学部の設置

昭和26(1951)年、学校教育法の一部改正により短期大学の設置が公布された。

戦後の復興を急ぐわが国において中堅技術者養成は急務であり、工業都市として発展の途にあった宇部市では、地元企業等で働く勤労青年を対象とした夜間工業短期大学の開設が望まれていた。高度な工業技術を習得し、地方産業の発展に寄与する人材を育成することを目的とし、設置場所は教官陣容のそろった工学部に併設する計画で、費用の一切(4,500万円)を市が負担するという条件の下、宇部市は国や県、山口大学に設立を要望した。これを受けて松山基範学長は、昭和27年10月に文部省へ設置認可申請書を提出し、翌年2月大学設置審議会委員による実地視察を経て、同年8月1日に開校した。

短期大学部は夜間授業を行うものとし、修業年限は3年、機械科と工業化学科(定員各学科40名ずつ)の2科で発足した。その後、昭和40年に電気科、翌41年に土木科、昭和49年には情報処理工学科が増設された。経済的理由で大学進学をあきらめざるを得ない優秀な学徒の受け皿でもあり、卒業生は産業界の発展に大いに寄与した。

※工業短期大学部は、平成5(1993)年3月末、工学部への改組統合により40年の歴史を閉じた。



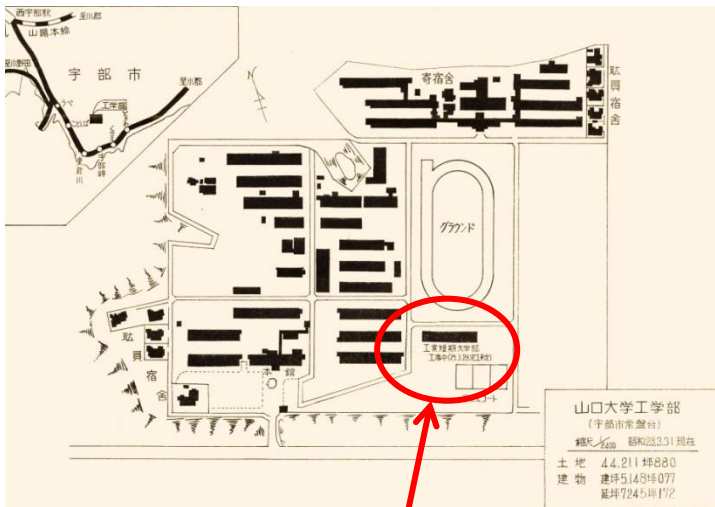
工業短期大学部校舎

2階建て赤瓦の洒落た建物で、現在の先端研究棟辺りにあった。



竣工間近の管理棟を視察(昭和31年)

左から4番目が松山基範学長



工学部平面図(昭和28年) ※ここが工業短期大学部の校舎



堀内熊男主事(昭和40年頃)

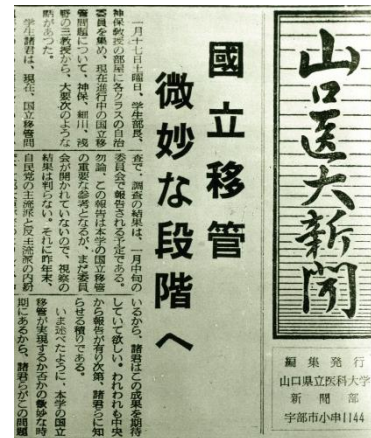
昭和36年から4年間と昭和44年からの2年間、主事として、学科の新設や専任教員の充実を目指し奔走し、工業短期大学部の発展に尽力した。

# 山口県立医科大学の国立移管

山口県立医科大学(旧制)は、戦後も国立移管の道を選ばず昭和27(1952)年から新制度による医科大学として地元の援助を受けて独自の道を歩んでいた。マスタープランに基づき、附属蛋白質化学研究所及び附属産業医学研究所の設置(昭和27年)、大学院医学研究科の設置(昭和33年)、附属病院の整備拡充など、着々と整備されていった。しかし、経営は赤字が続き、県にとって財政負担は極めて大きいものがあった。また、この時期山口県は自然災害に重ねて見舞われ、昭和31年には地方財政再建法の適用を受けるに至ったため、県議会では県立医科大学廃止の議論が持ち上がるようになった。



(上)山口県立医科大学正門第1棟(昭和36年頃)



(右)国立移管について伝える山口県立医科大学の新聞(昭和34年)

研究費や運営費は大幅に減額となり、大学としてはもはや国立移管に活路を見出すより途はなく、国に対して度々の陳情を行った。その結果、県が一定の施設整備を行った後に移管するという厳しい条件の下に許可を受け、昭和39年から4ヵ年計画で移管を完了した。

ここに山口大学医学部としての新たな歴史がスタートしたのである。

なお、国立移管に関するもう一つ重要な論議として、山口大学に併合されるか、国立の単科大学として発足するかの決定があった。当時、国立の単科医大は全くなかったこと、山口大学が併合を要望したこと、医大側も単科大学にこだわらなかったことで、併合の線がまとまった。



山口県立医科大学キャンパス(昭和39年頃)



山口大学医学部第1回卒業生(昭和43年)



医学部同窓会の「霜仁会」が創設されたのは、山口県立医科大学時代の昭和29年。宇部市に縁の深い霜降山の「霜」と、医は仁術の「仁」とって「霜仁会」と名付けられた。